ひ孫・最上さんより

## 陸羯南旧蔵資料寄贈

令和 8 年 8 月 26 日、最上武雄さんから陸羯南旧蔵の品 14 点が寄贈され、弘前市から感謝状が贈られた。

最上さんは陸羯南の四女・ともえの孫にあたる。今回寄贈されたものは、羯南愛用の瓢箪、懐中時計、印鑑などである。最上氏は、ともえの住んでいた神奈川県葉山町の家に何度も遊びに行っており、生前の羯南の話を聞いていた一人である。瓢箪について「鑑賞用か、飲み物を入れて使っていたかは不明だが、羯南は大酒飲みではなく、時々晩酌をする程度だった」と聞いていた。

「羯南には男の子はいたが早逝し、女の子たちが残った。そうすると自然と男の子の役割をする子が出てくる。それがともえだった」ことから、最上家に多くの遺品が受け継がれたという。また、今回の寄贈品に急遽追加された「津軽びな」は、ともえによると「津軽の殿様から陸家にいただいたもの。300 年くらい前の品」だという。

最上さんは「羯南のふるさとで快く受けとっていただき、ほっとしたし非常にうれしい」と語った。来年は、陸羯南生誕 170 年・没後 120 年の節目となる。今回寄贈いただいたものは大切に保管し、次代にしっかり伝えていきたい。



羯南が愛用した瓢箪や印鑑



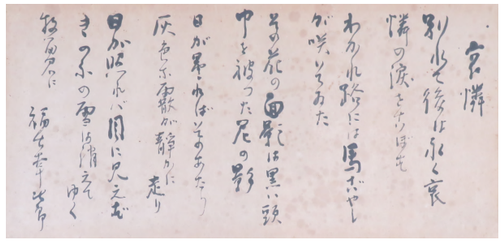
感謝状を受け取る最上武雄さん（左）

次回スポット企画展

## 新収蔵資料展

会期：令和 8 年 12 月 9 日～令和 9 年 3 月 1 日（12 月 29 日～1 月 3 日休館）

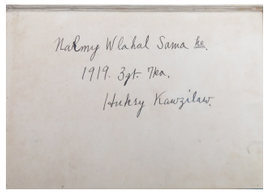
大正時代の口語自由詩の詩人・福士幸次郎の詩額「哀憐」、第一詩集『太陽の子』（鳴海要吉宛 献辞入り）、詩稿「夢」などの直筆資料を中心に展示するほか、近年収蔵した資料を紹介する。



福士幸次郎 詩額「哀憐」



福士幸次郎 詩集
『太陽の子』
洛陽堂 大正 3 年 4 月 8 日




（鳴海要吉宛 献辞）

Nalmy Wlahal Sama he.
1919. 3gt. 7ka.
Huksy Kawjilow.

文学散歩

## コンカン・ウォーク！～『壁の花』直木賞受賞 70 年　今官一の生家を訪ねて

講師：櫛引洋一（企画研究専門員）　期日：令和 8 年 5 月 9 日（土）



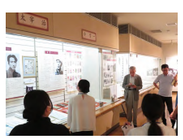
青森県初の直木賞作家・今官一の生家である蘭庭院を目指し、追手門広場内にある文学碑から玉田酒造、禅林街などの官一ゆかりの地をたどった。蘭庭院ではご住職のご厚意でお墓、本堂をご案内いただくなど貴重な体験となった。

## 博物館実習

期間：令和 8 年 8 月 19 日～令和 8 年 8 月 23 日

今年度は博物館実習生を 3 名受け入れ、5 日間を通して常設作家の解説や、収蔵資料を取り扱う実習など、文学館の業務について理解を深めた。最終日には実習のしめくくりとして、一般の来館者に向けての展示解説を行った。





## お知らせ

〈文学忌〉

**忌日を含む 1 週間程度ロビー展示を行います。**
**忌日は無料開館、午前 10 時より朗読があります。**

令和 9 年 3 月 1 日(月)　今 官一

〈休館日〉

**〇年末年始の休館日**
令和 8 年 12 月 29 日～令和 9 年 1 月 3 日
**〇展示替えのための休館日**
令和 9 年 3 月 22 日～3 月 31 日





# 北の文脈ニュース　第 95 号

*Kitano bunmyaku news*

第 50 回企画展『『壁の花』直木賞受賞 70 年　今官一 －わが友　太宰治」記念講演会

期日：令和 8 年 8 月 22 日（土）
会場：弘前市立観光館多目的ホール

## 「今官一の文学 －「場外れ」のモダニストの魅力－」　講師 仁平 政人氏（東北大学大学院文学研究科教授）

講師プロフィール
1978 年生まれ。茨城県出身。東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了。弘前大学教育学部講師を経て、2019 年から東北大学大学院文学研究科に勤務。専門は日本近現代文学で、特に川端康成を中心とした 20 世紀前半のモダニズム文学や、寺山修司の活動などに関する研究を行う。主な著書に『川端康成の方法 －二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成－』（東北大学出版会）、『青森の文学世界　〈北の文脈〉を読み直す』（共編著、弘前大学出版会）、『〈転生〉する川端康成』Ⅰ・Ⅱ（共編著、文学通信）などがある。




### ― 講演要旨（仁平氏記）―

今官一は青森県初の直木賞作家、また太宰治の友人として知られるが、今日では作品が読まれる機会は少ない。その作品は「詩よりも美しい文章」（高見順）というように文章の美しさ・詩的な魅力で高く評価されるが、その一方で「読みにくい・わかりにくい」という批判もしばしば受けている。もっとも、今官一は商業主義から距離を取り、自作をあえて「売れ残りや場外れもの」と呼んだ作家であり、もともと単純な「読みやすさ」は彼の目指すところではなかった。では、今の文学とはどのようなものだったのか？ 本講演では、今官一の作家としての来歴を辿るとともに、その文学の魅力に迫ることを試みた。

今官一は弘前市に生まれ、早くから作家になることを志望し、東奥義塾在学中に詩人・福士幸次郎の知遇を得る。今が文学を志した大正末～昭和初期には、表現の変革を追究するモダニズム文学（新感覚派など）と、政治的な革命を目指すプロレタリア文学という二つの文学潮流があった。今官一は新感覚派の横光利一に師事する一方、プロレタリア芸術運動にも参加するというように、その双方から影響を受けて出発している。一九三三年頃からは太宰治と親交を結び、互いに刺激を与え合う関係を築く。実際に、初期の小説には太宰の文学と重なる要素も様々に認められる。

ただしその一方で、今官一の文学は、出発期から独自の性格も示している。文壇で脚光を浴びたデビュー作「船」（一九三二年）は、ロシアからの難破船の生き残りである少年「わしりい」と、その保護者となった「私」の物語を通して、アイデンティティをめぐる問題を描く小説である。この小説には、以下に挙げる今官一の文学の三つの特性が鮮やかに示されている。第一に、文献を多く引用し、解読しながら語りを進めるスタイル。第二に、音・文字に強くこだわり、方言や異言語・文語体などを交錯させる文体への志向。そして第三に、国家や民族などで「あいだ」の立場にあるマイノリティへのまなざし。三点目は特に近代のアイヌの人々に対する関心として、のちの代表作『巨いなる樹々の落葉』などに結実している。

戦後の今官一は、明治維新期をめぐる歴史小説や、自身の従軍体験に基づく戦記文学をはじめ、多様な創作を行っている。一九五六年に直木賞を受賞した『壁の花』は、今の文学の特性を豊かに示す作品集である。『壁の花』所収の小説「暗い砦」は、架空の人物「カニ」をめぐるドキュメンタリー仕立ての歴史ミステリーである。高名な「無法者」であった「カニ」は、なぜ一人の少女を射殺し、自ら望んで死刑となったのか？作家「私」は、資料や証言、元裁判官の叔父との対話を通して、「カニ」の生涯をめぐる謎を解き明かしていく。そこで示されるのは、無法者である「カニ」の人生と、国家の歴史が思いがけないかたちでつながっていたということだ。この作品は、辺境の無名の人物の生を通して近代日本を寓意的に照らし出している。

また、戦後の今官一は津軽をめぐるエッセイ・小説も数多く執筆している。エッセイ「私のひろさき」では、ユーモアに満ちた内容ながら、言葉の音楽性の重視や、複数言語の交錯、架空のエピソードの引用・解読など、初期のスタイルからつながる性格が豊かに示されている。

以上のように、今の文学は、戦前のモダニズムと結びつく方法や発想を、戦後の歴史小説や津軽をめぐる表現でも自在に活用し続けた点に特色がある。このような意味で、今官一を〈「場外れ」のモダニスト〉と呼ぶことができるだろう。その独特な文学世界は、今日なお尽きせぬ魅力を持ち続けている。

参加者アンケートより



・今官一よみたくなりました。青森とアイヌのつながりも意識しました。
・今官一の気付かなかった面白さを新ためて実感させていただきました。
・今官一さんにとても興味が湧き、太宰と共に郷土の作家として読みたいと思った。また、今官一さんの妹さんにも会えて感動しました。